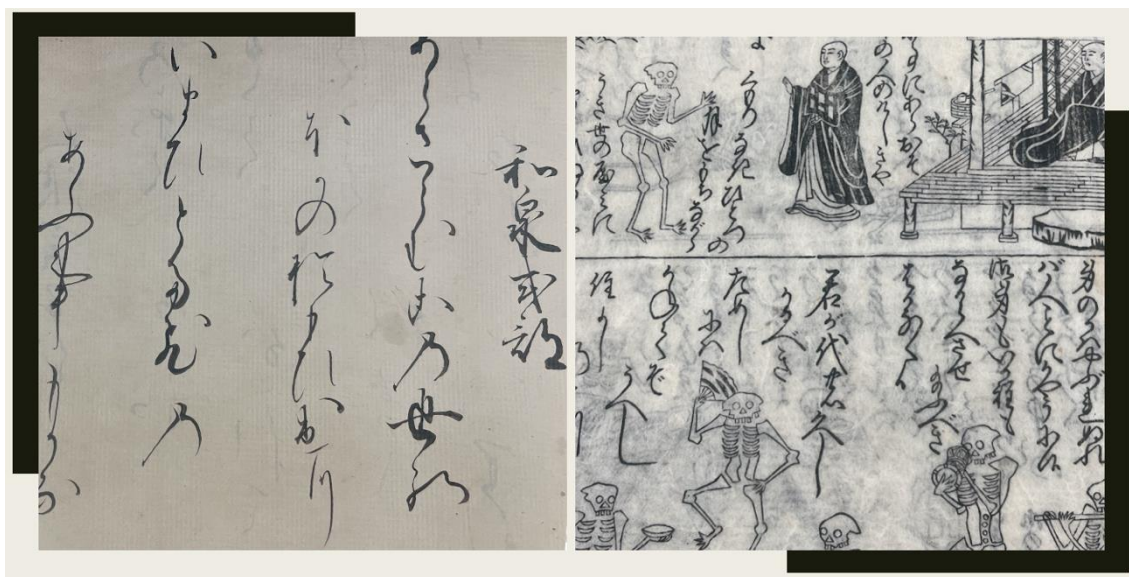


鶴見大学図書館 第92回貴重書ミニ展示

見る・読む・比べる V

—ドキュメンテーション学科による古典籍へのアプローチ—



期間：2023年12月14日（木）～26日（火）

ごあいさつ







このミニ展示会は、鶴見大学文学部ドキュメンテーション学科の書誌学コース授業「古写本演習」と「古版本演習」を履修している学生さんによる展示会です。コロナなどで長い間中断していましたが、おかげさまで復活でき、5回目となりました。鶴見大学が所蔵する貴重書を、学生の皆さんが実際に手に取って調査した古典籍（明治以前の古い本）を紹介します。

古典籍は単に昔の文章を伝えているだけではありません。その書き方や姿にも、重要な意味があります。今回、みなさんにひとつひとつの古典籍の姿、書かれ方・印刷のされ方の違いに触れて頂くことで古典籍の魅力を知ってもらえたなら、心から嬉しく思います。







(伊倉史人・万波寿子)

【展示書目】

【写本】

- 1  『百人一首』 1帖 〔江戸前期〕写・伝西郊実信筆（ますがたほん 枳形本）
- 2  『小倉山荘色紙和歌』 1冊 天正20年（1592年）写・養院筆
- 3  『百人一首』 1帖 〔江戸中期〕写・北条氏利筆（ますがたほん 枳形本）
- 4  『百人一首』 1帖 寛永16年（1639）写・書写者不明（しほんほん 四半本）
- 5  『百人一首』 1帖 〔室町末期〕写・伝鳥飼宗清筆
- 6  『百人一首系図』 1軸 〔室町末〕写・里村紹巴筆

【版本】

- 7  『しやうばいざうらいまじびき 商売往来絵字引』 2冊 江戸後期(1864年)刊
参考1『商売往来』（文化6年再版、整版）
- 8  『いっきゅうがいきつ 一休骸骨』 1冊 元禄5年(1692年)刊
- 9  『こかつしほん 普門品』 1帖 正保4(1647年)刊（てんかいほん 古活字版、天海版）
- 10  （ごつめく 五つ目綴）『てんほんみょうほうれんげきやう 添品妙法蓮華経』 8冊 寛永15年(1638年)刊（こかつしほん 古活字版、てんかいほん 天海版）
- 11  『だいざいもくろく 大蔵目録』 1冊 寛永19年(1642年)刊（こうらいばんだいざいもくろく 高麗版大蔵経覆刻本）
- 12  『くわんせりゅうほん 観世流謡本』 5帖 刊元和6年(1620年)（元和卯月本・こかつしほん 古活字版）

参考2『龍田』1帖（観世流謡本、慶長年間刊、古活字版）

参考3『放生川』1帖（観世流謡本、慶長年間刊、古活字版）

参考4『呉羽』1帖（観世流謡本、慶長年間刊、古活字版）

参考5『道明寺』1帖（観世流謡本、慶長年間刊、古活字版、嵯峨本）

参考6『浮舟』1帖（観世流謡本、慶長年間刊、古活字版、嵯峨本）

参考7『観世百番』20冊箱入（正徳2年[1712年]刊、整版、袋綴装）

写本

古典籍はまず二種類に大別されます。写本と版本です。写本とは、手書きされた本のこと。日本には本を書写し、時にはそれに註釈を入れるなど変化を加えたものを大切に守り伝えていく豊かな写本文化がありました。今ここにある展示品も、鶴見大学図書館に収蔵されるまで先人達が守り伝えてきたものです。

今回、誰もが知る百人一首の写本を集めました。私たちの知る百人一首はどれも同じですが、古典籍の百人一首はたいへんバリエーションが豊富で、本文だけでなく姿形也多岐にわたります。例えば古典籍の装訂として最もスタンダードな袋綴装ふくろじぎょう以外の本や、縦長ではなく正方形に近いますがたぼん枡形本が多く展示され、表紙の文様も変化に富みます。見た目の違いをじっくり見てください。

(I) 百人一首の古写本

1 『百人一首』 1帖 (江戸前期) 写・伝西郊実信筆ますがたぼん (枡形本)

原装山吹茶色金糸宝尽くし文様裂表紙 (16.2×15.5 cm)。外題なし。見返し、金の切箔と砂子が散らされており、また銀の切箔と砂子による雲模様が描かれている。見返し、金切箔砂子散・銀切箔砂子雲模様。遊紙前1丁、後2丁。内題なし。料紙、布目地の斐紙。字面高さ、約13.0 cm。和歌を散らし書きに記す。墨付丁数、2折51丁。

巻末に藤原季有の加証奥書あり (「此百人一首者實信朝臣ノ筆跡也或人所望にノよつて加奥書畢ノ藤原季有」)。奥書によれば、本書の書写者は西効実信 (さいこうさねのぶ) となる。実信は寛永11年 (1634) 生まれ。父は三条西実号 (さんじょうにしさねな)。従四下。備前守、左中将等を務めた (『系図纂要』)。優秀な歌人であったという。藤原季有は生没年未詳。権大納言公理 (竹中季輔とも) の次男。竹中季有・四辻季有・羽林季有とも称す。正四位下 (『諸家伝』)。

古筆了榮の極札 (遊紙に貼付) あり。「西郊殿實信百人一首ノ御奥書竹中殿季有 [琴山] (単郭正方形墨印)」。別に「六半本一冊百人一首 奥書竹中季有ノ西郊備前守実信 真蹟 [古筆] (単郭長方形墨印) ノ了佐外題添」と記した鑑定者不明の極札が付属する。この極札において外題極札を了佐とするのは誤りで、実際は了榮と見られる。

桐箱あり。函内側左下に「青仙院さしあけ候」とあり。また、蓋内側左下に「佐藤家所蔵印」(長方形朱印)を捺す。

(藤川美月・星野優奈・坪川未空)

2 袋綴装 『小倉山荘色紙和歌』 1冊 天正20年(1592年)写・養院筆

本文共紙表紙(25.0×18.9cm)。浅葱色表紙。表紙左肩斐紙短冊に「百人一首」と墨書(本文とは別筆)。見返し、本文共紙、遊紙、前1丁あり。料紙は楮紙。每半葉8行。字面高さ約20.6cm、墨付21丁。内題「小倉山荘色紙和歌」。奥書に「天正壬辰首夏上旬／駿河国住侶養院書之／(梵字)山下治部藏」とあり。「天正壬辰」は天正20年(1592)。駿河国(現静岡県)の僧侶の養院が書写者と思われるが、詳細は不明。「山下治部」は別筆で本書の旧蔵者か。

印記、「瘦松園文庫章」(1丁表)。心理学者で禅や中国思想等の研究で知られる黒田亮(1890-1947)の旧蔵書。他に裏表紙見返しに墨印があるが判読不明。

(帯川和真・加藤勇成・草薙龍)

(II) 異本百人一首(百人秀歌型百人一首)

百人一首の伝本の中には、収載歌は百人一首と同じものでありながら、その配列が百人秀歌に一致するものが20点以上確認されています。それを「異本百人一首(百人秀歌型百人一首)」(吉海氏)と呼んでいます。鶴見大学図書館にも異本百人一首3点(内1点は秀歌とも配列が異なる)が所蔵されています。

百人秀歌とは：

藤原定家が編纂したと確実視されている秀歌撰。101首収録。百人秀歌には、後鳥羽院、順徳院の歌がなく、代わりに一条院皇后宮・権中納言国信・権中納言長方の歌が採録されている。どちらにも源俊頼の歌が採られているが、百人一首では「うかりける人をはつせの山おろしよはげしかれとはいのらぬものを」、百人秀歌では「山桜咲きそめしより久方の雲居に見ゆる滝の白糸」を選ぶ。

《参考文献》

・『和歌文学大辞典』(古典ライブラリー・2014.12)「百人秀歌」(吉海直人氏執筆)

百人秀歌の配列(百人一首の歌番号で示す)：

1～4・6・7・11・5・16～18・13・9・8・12・10・14・15・19・20・28・21・24・30・29・33・22・35・31・23・34・32・36・26・25・27・39・37・38・43・40・41・45・44・42・48・46・49～52・47・一条院皇后宮・68・54・53・69・70・55・62・56・58・59・57・61・60・64・63・67・71・66・73・権中納言国信・72・66・74・77・80・76・79・78・75・82・84・85・81・83・86・88・権中納言長方・90・89・87・92・91・95・94・93・98・97・96※99・100欠

《参考文献》

・吉海直人氏「百人秀歌型配列の異本百人一首について」(和歌文学研究第61号・1990.10)

3 綴葉装 『百人一首』 1帖 〔江戸中期〕写・北条氏利筆（ますがみぼん 枅形本）

原装紺色地花唐草文様裂表紙（16.5×17.7 cm）。原装左肩金砂子散内曇題簽に本文別筆で「百人一首」と墨書。見返し、銀切箔金砂子散。遊紙前1丁、後1丁。内題、なし。料紙、金泥霞引秋草文様斐紙。每半葉9行。字面高さ、約13.5 cm。1首2行書。墨付、2折19丁。

巻末に、「延宝六年午春於狭山書之」という奥書あり。加えて北条氏利の息子である氏朝の「右者／先考御筆也／被与休山／氏朝記」という加証奥書がある。北条氏朝とは寛文9年生まれ、享保20年没の河内狭山藩の第5代藩主。「先考」は父氏利のことか。「休山」とは明暦元年生まれ、享保9年没の狩野休山と推測する。

本書は、『百人秀歌』の配列を基盤とした異本百人一首。但し、秀歌9番歌たちわかれいなばの山のみねにおふる松としきかは今かえりこん（行平）を秀歌8番歌（光孝天皇）の後に載せる。また、家隆の官位表記は百首の「従二位」ではなく秀歌の「正三位」とする。

（青山莉央、池田夏菜、小林郁真）

4 綴葉装 『百人一首』 1帖 寛永16年（1639）写・書写者不明（しはんぼん 四半本）

原装砥粉色金箔揉箔散（24.0×17.3 cm）。表紙左肩金霞引布目地題簽に「〈小／倉〉百人一首」と墨書（本分とは別筆）。見返し、本文共紙。遊紙、後1丁。内題、なし。料紙、布目地の斐紙。每半葉10行。字面高さ、約19.5 cm。一種一行書き。墨付12丁。

巻末に「此一冊紹巴自筆以写本書之／遂校合者也／寛永拾六年 初夏下旬」と書写奥書あり。本書書写者は不明だが、紹巴筆本を底本としたことが分かる。

収録されている歌は、百人一首と同一（家隆の官位は「正三位」）のものであるが、歌順は百人秀歌に一致する。

（秋山楓芽・後藤愛菜・宍戸愛美）

5 綴葉装 『百人一首』 1帖 〔室町時代末期〕写・伝鳥飼宗清筆

改装（原装一部流用）、青丹色、宝相華文様表紙（20.0 cm×15.4 cm）。見返し、前後金紙。遊紙、後1丁。料紙、楮紙、每半丁6行（二首）。字面高さ、約17.6 cm、1首2行書き、作者約4字下げ。墨付き丁数、26丁。奥書はない。

きわめふだ 極札が巻頭見返しに糊付けされている。表に「鳥飼宗清 秋の田の（井狩源右衛門の印）」、裏に「百人一首辛酉六（かのとり 朱色の井狩源右衛門の印）」。

印記、「峻斎秘笈」（陽朱文、単郭正方形）を表紙、巻頭、巻末遊紙に捺す。印主は佐久間峻斎。また、巻頭に「残花書屋」（陽朱文、単郭楕円形）を捺す。同印は戸川残花および戸川浜雄のものであるが、どちらが旧蔵書かは不明。

巻末に和漢朗詠集より漢詩、和歌各一首を散らし書きにする。

清唳数聲松下鶴 寒光一點竹間燈

わかのうちにしほみちくらしかたを波あしべをさして田鶴なきわたる

本書は百人一首と所収歌が一致するが、配列が異なる。また百人秀歌とも異なった配列を持つ。以下にその配列を示す（百人一首の歌番号を用いた）。

1～41→46→44→45→42→43→47→58→60→59→61→63→64→70→73→74→71
→72→76→77→82～89→86～89→62→90→100

【残花書屋の印】

実業家である戸川浜雄及び彼の父であり著名な文学者、戸川残花の印。峻斎秘笈は、医師であり古医書の研究も行った佐久間峻斎の印である。戸川浜雄の正確な不明なものの、戸川残花の没年（1924）から推測すると、戸川浜雄は1916年に生まれた佐久間より早く生まれていると推測される。したがって、蔵書印の押された順序は「残花書屋」が先で、「峻斎秘笈」が後と考えられる。

（大場遥・遠藤莉々・久保田大智）

（Ⅲ）百人一首系図

6 かんすぼん 卷子本 『百人一首系図』 1軸 〔室町末〕写・里村紹巴筆

後補濃藍色宝尽七宝輪違雲菱鶴文様表（26.8×23.7 cm）。表紙左肩題簽「百人一首系図」（本文とは別筆）。見返し、銀切箔散らしの斐紙。内題等なし。料紙、26.8×40.5 cm程度の斐紙を9紙継ぐ。一紙14行程度。字面高さ、約26.5糧。奥書「従未明老眼ニ記候、不可有正記候、／重而可承候、朱点已下無校合候、／只為申含候、／（紹巴花押）／御両三人御中」

上段の歌人名は別筆で、下段の注記、系図、奥書は紹巴の筆跡と推定される（慶應義塾図書館蔵「里村紹巴筆書状（連歌）」と比較の結果同筆と認められた）。某より、百人一首の歌人の名を記された料紙が渡され、注を所望されたのではないか。かなり短時間で書き上げたもので、「正記」ではなく、重ねて取り組みたいと奥書には記されている。

（玉山 竜久・山崎希祥・西井涼）

版本

古典籍のうち、印刷されたものを版本（または刊本）と呼びます。写本と違い、基本的には同じものをたくさんつくり出すことができるため、多くの人に本が行き渡りました。日本では江戸時代の初めに出版市場が確立し、版本は社会を変えていきました。

今回の展示品も、日本最初の出版文化の様子をよく示しています。作るのが簡単で見た目も整っている袋綴装、最もポピュラーな印刷方法である木の板に本文を彫って印刷原版とする整版本を基本として、その変化を注視してください。

7 ふくろとじそう 『しょうばいおうらいえじびき』 2冊 江戸後期(1864年)刊

『商売往来』は元々、堀流水軒著により、江戸時代寺子屋での手習いテキストとして元禄7年(1694)大阪から出版された。商売をする上での最低限の学力・詰め込まれた基礎知識・その手軽さと有用性から明治初期まで200種類の増補、改版を重ねて大量に流布されたのである。

この『商売往来絵字引』は整版印刷の版本で、縦17.0cm×横11.1cmと、やはり手軽な大きさをしており、上記の商売往来としての特性に一致する。なお、往来物の特徴として、表紙にタイトルが書かれた外題のほかに目次が書かれた添外題があるが(参考1『商売往来』の表紙中央)、この本にはついていない。

絵字引とは絵で引く辞典のことで、字が読めない人にも対応したもの。個人の書き込みなどは見られなかったため、個人が独学したものではなく、複数人で回して読んでいたものだと推測した。

藍鼠色をした本来の表紙がこれ以上劣化・破損しないようにするため、黄色布目文様の別表紙がつけられている。その役割は現代の本でいうカバーに相当するもの。これはおそらく幕末から近代初めのころにつけられたもので、当時の所蔵者が補修したものと考えられる。

参考1『商売往来』(文化6年再版、整版)

(草薙龍、倉田瑛仁、西井涼)

8 ふくろとじそう 『いっけうがいこつ』 1冊 元禄5年(1692年)刊

25.5×17.5cm、10丁。4～6丁に骸骨の絵入り。

早稲田古典籍総合データベースで4件、国書データベースで33件所蔵が確認できる。国書データベースで画像があるものは15冊である。これらを調べた際に、見返しに「達磨大師*」の絵があった。だが展示品の鶴見本には「達磨大師」の絵はない。削られたか、初めからないものかはっきりしたことはわからない。

内容は仏教的なものが多いが、江戸時代に入ると庶民向けの仮名法語として売られた。その根拠としては骸骨の踊りや、人間と同じようなことをしている場面があること。本文内でもあの世とこの世はそこまで違わないといった表現が見られる。作者は有名な禅僧一休（一休宗純）とされたが、現在は仮託本（本来の作者ではない人を作者と装った本）であると言われる。*達磨大師=禅宗の祖。

『一休骸骨』は、版本としては、刊記による違いとして①慶長頃板本、②孟春吉日本、③元禄五年壬申曆九月吉辰本があって、その中で鶴見本は③にあたる。データベースで調べた際に③のものが特に多かった。この要因としては、当時は元禄文化が興っており読者が増えたこと、かつ出版技術の発展により、大量生産が可能になったことが考えられる。ただし、③（だけでなく比較的数の多い②も）に関しては、求版（版權を買い取る）や改版が多くみられるため、元禄5年刊ではなく後刷りの可能性もある。

（加藤勇成、深野亜希子、藤岡要）

9 おりほんそう ふもんぼん 『普門品』1帖 正保4(1647年)刊 (古活字版、てんかいぼん天海版)

通称『観音経』。縦28.6 cm×横9.7 cm。天海版大蔵経のひとつである。天海版大蔵経とは、日本で初めて活字で印刷された大蔵経（一切の仏教経典を集めたもの）で、徳川家康を補佐した天海僧正が開版したもの。当時は権力のある者が活字で本を印刷することが流行しており、これらは古活字版と称される。活字の印刷とは、ハンコのような活字を一字ずつ並べて文章になるように組んで印刷する方法である。この性質上、何度も組み替えて違う印刷物を印刷可能である反面、再版の際にはまた活字を組まなければならないため、再版が面倒である。また、非常に耐久性が低い印刷方法であった。よって、天海版大蔵経は短期間で限られた数しか印刷されず、当時の有力な大寺院等に下賜された。権力者に賜られたため、紙の中に雲母が含まれる等豪華な作りである。

しかし、この本は、とても豪華な作りであるにも関わらず、本文中に朱で書き込みがある。これは、持ち主が勉強した痕跡である。天海版大蔵経は有力な大寺院に下賜されているため、この書物を学ぼうとした人は相当な高僧や額の高い人物であろう。天海版出版の後、より利用しやすい流布版の大蔵経であるおうぼくぼん黄檗版大蔵経が出現する。これは、天海版よりはるかに利用しやすい冊子体であった。折本装の天海版は利用には不便であったが、人々の学びたい気持ちが黄檗版大蔵経を印刷するきっかけになったのではないだろうか。

なお、本書は大正5年(1916年)に保存されていた活字を使用して刊行したものの可能性が指摘されている。また、枠外に近代と思われる書き込みがあり、昭和以降の人も関心を寄せていたのだと思われる。

（秋山楓芽）

10 袋綴装 『添品妙法蓮華經』8冊 寛永15年(1638年)刊(古活字版、天海版)

8巻8冊、枯色無地表紙(28.6cm×21.0cm)、五つ目綴。表紙左肩楮紙書き題簽で「添品妙法蓮華經 幾(巻数)」と全巻に題が付けられている。見返し本文共紙、遊紙はなし。料紙の種類は楮紙、毎半丁12行、基本1行17字にて均等に配列されているが、1部4字区切りとなっている。漢文楷書体にて刷られ、訓読点や送り仮名は付けられていない。版本によくある魚尾等はないが、丁の表裏に渡り「樹 添品妙法蓮華經巻幾(巻数) 幾(丁数)」とある。尾題は「添品妙法蓮華經巻第幾(巻数) 樹」。なお、丁数表示は20の次が11となり進められる。墨付27丁。

蔵書印が巻頭、巻末、見返し、表紙にあり。見返しに「感髓」(黒陽刻、単郭長方形)。巻頭に「不許/超倫蔵/出門」(朱陽刻、重郭懸魚形)、また重ねて押された印があり、こちらは解読不能である。そして巻頭巻末表紙に「无礙庵」(朱陽刻、単郭長方形)。第八冊末にのみ、「戊戌」(朱陽刻、単郭長方形)とある。

全巻見返しに「貞道」と墨で書き入れがあり、また、第1冊頭見返し、第8冊末見返しにのみ「元禄八乙亥二月求之 昌春日嘗(花押)」とある。「元禄八」は1695年。

本書は天海という僧により計画され、徳川家光支援の元寛永寺で刊行された、天海版と呼ばれる大蔵経版本である。天海版は基本的には展示品9『普門品』のように折本で制作されたが、本書は冊子体の形を採り、普及した装訂である袋綴装である。折本の天海版と比較すると、字形等から同じ版木を使用しているにもかかわらず、冊子体でも整った状態で文字が紙に収まっているため、版木制作の時点で、冊子体での刊行も予定していたものとみられる。

天海版は耐久性のない古活字という印刷方法で制作されたため、刷られた部数は決して多くない。従って後に広く流通した黄檗版(整版印刷)と違い、宝物であるという認識を受けやすい。本書は天海版の中では珍しい冊子体で、学ぶことに適した形態ではあるが、書き入れ等が全く見られず、やはり宝物としての扱いを受けてきたと推測される。

また、本書の旧蔵者が日本古典美術を専門とする学者の今泉雄作であるという点からも、本書の扱われ方が窺える。

(遠藤莉々)

11 袋綴装 『大蔵目録』1冊 寛永19年(1642年)刊(整版、高麗版大蔵経模刻本)

上中下合綴1冊、界線あり、整版。この目録は、近世前期である当時、仏教を勉強したい人が増え、大蔵経の需要も高まったためにできた本であると推測される。大蔵経は本来、ごく一部の人が宝物や信仰の対象として所有するにすぎなかった。しかし、より広い層の人々が読んでみたいという需要が生まれ、カタログが必要になり、この書が一般の本屋から出版された。

表紙には「宙」の文字が書かれている。これは中国の千字文といい、日本でいういろは歌のようなもので、すべて異なる漢字千字で作られた漢詩である。たくさんものに順序を付ける際によく利用される。「宙」は千字文の文字の中で6番目にあり、大きな書庫の中で6番目に

配架されていたものと考えられる。目録なので書庫の中で最初の方に置かれていたようだ。また、少し縦長で、中国や朝鮮の本に似ているが、料紙がそれらの国で使われた竹でできた竹紙ではなく、日本で最もよく使われている楮紙であり、日本の本屋の名前も入っているため、日本製の本であるとわかる。

本書を出版した西村又左衛門は、江戸初期に活動していた本屋。日本の出版文化を作った人物の1人であると言えよう。他にも『御成敗式目』などを出版するなど、基礎的な書物を多く出版した。この「大蔵目録」も基礎的な書物として出版されたと考えられ、当時の書物需要を知る上で重要である。

(帯川和真)

12 綴葉装『観世流謡本』5帖 刊元和6年(1620年)(元和卯月本・古活字版)

表紙は紺色金泥草花文様で、写本のような豪華な装訂となっている。大きさは24.6×17.5 cm。本文の料紙には雲母(きら)が塗られていて、これは墨のにじみ止めの他に、装飾効果がある。表紙の題簽には、通常外題(表紙上に記された書名)が書かれていることが多いが、本書では内容に関する和歌などが手書きされている。版本だが、写本に近づけた姿と言えよう。

本文では、右側にゴマのような点が見られる。これは節博士と言ひ、謡(能の脚本である謡曲文にフシをつけて歌う音曲)の記譜(ししゅう)詞章(浄瑠璃の本文)の傍らに記された、節の高低や長短すなわち旋律や拍子を指示する符号である。現在の音符のようなものである。

そもそも謡本とは、謡のテキストとして書写・印刷された本。現存する最古の謡本は、応永21年以降(室町時代)の世阿弥自筆本9巻である。謡が公家、武家、富商などの素人の間に流行した16世紀(室町時代～安土桃山時代)ごろから、謡の稽古用のテキストとして謡本がしきりに書写されるようになる。

17世紀(慶長前後から江戸初期)になると、謡人口や層が増大し、出版活動が盛んになり、謡本は続々と刊行されるようになった。なかでも、1600-1601年に鳥養宗晰が出版した金春流謡本は最初に印刷された謡本である。宗晰が書写または出版した謡本は「車屋本」と呼ばれる。

江戸時代ごく初期の1605年～1615年には当時の謡本の主流であった観世流の謡本がつぎつぎに出版され、特に桃山文化の逸品とされる豪華な「光悦本(嵯峨本)」が名高い。展示されている参考4『道明寺』と参考5『浮舟』がこれにあたる。

元和6年(江戸初期)の奥付と観世大夫暮閑の名のある「元和卯月本(げんなうづきぼん)」は、刊年を明記した最初の謡本で、五流(能楽のシテ方(能の主役など)の五つの流派の総称。室町時代に創立された観世、宝生、金春、金剛の四座に、江戸初期におこった喜多流を合わせたもの。)を通じて最初の家元公認本である。本書こそ、この元和卯月本である。

江戸初期以降、謡が一層盛んになると、書店間の競争も激しさを増し、謡本の体裁も装備工夫がされていった。参考6「観世百番」と書かれている慳貪箱入りの観世流謡本は、袋綴装で庶民一般向けに出版されたものである。謡の裾野の広さを示すものであろう。

参考書：『能楽大事典』『新版 能・狂言事典』『日本古典文学大辞典』

参考2『龍田』1帖（観世流謡本、慶長年間刊、古活字版）

参考3『放生川』1帖（観世流謡本、慶長年間刊、古活字版）

参考4『呉羽』1帖（観世流謡本、慶長年間刊、古活字版）

参考5『道明寺』1帖（観世流謡本、慶長年間刊、古活字版、嵯峨本）

参考6『浮舟』1帖（観世流謡本、慶長年間刊、古活字版、嵯峨本）

参考7『観世百番』20冊箱入（正徳2年[1712年]刊、整版、袋綴装）

（後藤愛菜、坪川未空、東葭明音）